

ときを越え
受け継がれるもの

古城林恵比寿舞

Ⅱ 前沢区古城・林地区Ⅱ

俵の上に坐した大黒天の掛け声で笛や太鼓の演奏が始まると、釣竿を手に恵比寿が現れる。林地区の祝いの場を盛り上げてきた伝統芸能が恵比寿舞だ。舞台にはきらびやかな衣装の七福神がそろい、そこにタイ釣りや餅まきの演出が花を添える。

舞は、1846年（弘化3年）ごろに、地区の住民である長右エ門氏が始めたと伝わる。以降、同氏の長男の亀右エ門氏が2代目として大正末期まで、千田サダさんが3代目として昭和40年代中ごろまで舞うも、一度途絶える。58年にこのことを憂えた住民が古城林恵比寿舞伝承保存会を結成し、4代目となつて舞は復活。平成18年には若返りを図り、舞い手は5代目となっている。

現在、伝承保存会の会員は16人。呼ばれて北海道や東京でも舞を披露し、好評を得ている。



1



2



3

1 恵比寿の後ろにはそのほかの七福神が並び、一部は演奏も担う 2 見どころのタイを釣る場面。保存会結成以降は本物のタイを使っていて、重さで竿が折れたこともあったという 3 恒例の餅まき。終わりにまくほか、舞の途中でも釣りの餌に模して餅をまく

広告